

## 『朱子家礼』の変容

— 『応酬彙選』の場合 —

三 浦 國 雄

A transformation of the *Zhuzi jiali*: The case  
of *Yingchou huixuan*

MIURA Kunio

The “transformation” suggested in the title of this paper does not mean an intrinsic transformation of the text of the *Zhuzi jiali* itself — an alteration deriving from the struggle between fundamentalist (prescriptive) and situational (adaptive) readings of the text or notes—rather, it denotes an extrinsic transformation. This extrinsic transformation may be seen in the Qing-dynasty *Yingchou huixuan* considered here. This work consists of two volumes: a collection of letters and the text of the *Jiali*; the latter volume also contains a number of prefaces and appreciations, positioning the *Jiali* (or the concept of the *Jiali*) within the category of *yingchou*, or social intercourse. In other words, the attention and emphasis is directed outside the text itself, where a variety of social intercourse outside the clan has been routinized in the form of letters of greeting and appreciation (*tieshi*). It is here that we can see the transformation, not so much in the text of the *Jiali* itself, but in the significance of the *Jiali* or the concept of it. Through the *Yingchou huixuan* the text extends its antennae toward society and the community, and a *Jiali*—or an image of it—appears as a point of contact in human relations.

キーワード：朱子家礼 (Zhuzi jiali)、書儀 (model of letters)、尺牘 (letters)、応酬 (social intercourse)、清朝 (Qing dynasty)

## 小 序

小論は「『朱子家礼』の変容」と題しているが、そこで云う「変容」には二通りのあり方があると考えている。ひとつは、『朱子家礼』というテキストの内在的変容という問題である。『朱子家礼』は、時代・社会・習俗の変化、地域性の相違といった問題に対して恒常的な規範であり続けていったわけではない。原理主義（当為）と現場主義（妥協）との葛藤によってテキストや注釈に改変が生じている。いまひとつは、外在的変容である。ここでいう「外在」というのは、テキスト自体が改変されるのではなく、いわばその位置づけ、ないし概念自体が変化するという意味である。具体的に云えば、ここで取り上げる清代に現れた『応酬彙選』においては、『朱子家礼』（あるいは概念としての〈家礼〉）が〈酬世〉（＝応酬、世間とのお付き合い）に組み込まれて、〈酬世〉にカテゴライズされている。つまり、テキストの外へ視点・重点が移動し、宗族の〈外〉とのさまざまな〈応酬〉が〈帖式〉（挨拶の書状）として定式化されているのである。小論では、『応酬彙選二集』というテキストを通してこの第二点を検討してみたい。

### 1 日用類書の分類

本論に入る前に、『応酬彙選』もそのカテゴリに含まれる「日用類書」について確認しておきたい。近年、本邦でも『日用類書集成』（全14冊、汲古書院、1999年～2004年）が刊行されるなど、にわかに研究が活気づいてきているが、このような通俗書を研究対象として最初に取り上げられたのは仁井田陸氏であり、ほとんど時期を同じくして酒井忠夫氏が続かれた。最近、中国でも『明代通俗日用類書集刊』（全16冊、中国社会科学院歴史研究所文化室、2011年）が刊行されたのは喜ばしい。名称であるが、仁井田氏は「日用百科全書」、酒井氏は「日用類書」、または「通俗的日用類書」（中国はこれを襲用したのであろう）と呼ばれている。小論では、本邦の学界ではほぼ定着している「日用類書」という呼称を用いる。

一口に「日用類書」と云っても、日常生活に関わる実に多様な内容が含まれており、さまざまなタイプがあるが、ここでは酒井氏の分類を参考にして、ひとまず以下のような見取り図を掲げておきたい<sup>1)</sup>。

- ① 総括的事文—『事林広記』（南宋）、『三台万用正宗』（明）など。万宝全書系。
- ② 書簡啓笱—『啓笱青錢』（元代）など。
- ③ 故事関係—『書言故事』（宋代）など。

1) 『中国日用類書史の研究』、国書刊行会、2011年。

- ④ 幼学童蒙教育—『新增万宝元龍雜字』（明末）など。
- ⑤ 居家日用—『居家必用事類全集』（元～明）など。
- ⑥ 商用—『商賈指南』（明）など。
- ⑦ 農業・食生活—『便民図纂』（明）など<sup>2)</sup>。
- ⑧ 帖式—各類称呼、関禁契約、金銀袋簿、宗教科儀なども含む。
- ⑨ 村落日用類書—特定の村落用に編纂ないし抜き書きされた日用類書。民間の稿本、抄本で伝わる。『酬世彙編』、『応酬便覧』など<sup>3)</sup>。

小論で取り上げる『応酬彙選』なるテキストは、ひとまずは上記②の「書簡啓筭」に分類しうる。『温公書儀』に代表される唐宋時代の書儀の流れを汲むものであるが、『朱子家礼』との繋がりから云えば、⑤の「居家日用」との関係も無視できない。酒井氏はここに分類される『家礼簡儀』について、「その内容も文公家礼を中心とした部分と、諸家の翰墨を集めた部分とよりなり、後者に日用の各種の翰墨書式を収めている」と述べておられる（注1 前掲書209頁）。また、書簡の範例のほかに冠婚葬祭（実は「祭」を欠く）に関わる挨拶文、帖式を取めるから⑧的要素も含まれている。

## 2 『酬世錦囊』というテキスト

『応酬彙選』と類似のテキストとして『酬世錦囊』なる日用類書がある。成立年としては『応酬彙選』が清の康熙年間、『酬世錦囊』が乾隆年間だから、少なく見積もっても半世紀ほどの時差がある。しかし、どちらもタイトルに「応酬」や「酬世」と謳われているように世間での付き合い方が主題になっている上、いずれも『朱子家礼』を取り込んでいる。実は『酬世錦囊』と『朱子家礼』との関係については筆者はすでに初歩的な論考を発表していて<sup>4)</sup>、段取りから云うと、『応酬彙選』→『酬世錦囊』という順に論じるべきであったが、『酬世錦囊』を論じた時点ではまだ『応酬彙選』が視野に入っていなかったので致し方がない。時間的には顛倒しているが両者は内容的に密接に繋がっているため、前稿との重複をいとわず、行論上必要な知見を提供しておきたい。

2) この⑦の項目については、拙稿「沖縄に伝来した『万宝全書』」、『文芸論叢』第62号、で提唱しておいた。

3) ⑨の立項は、王振忠「礼生与儀式—明清以来徽州村落的文化資源」、『明清以来徽州村落社会史研究』第四章、上海人民出版社、2011年、による。

4) 拙稿「『酬世錦囊』の中の『朱子家礼』」、関西大学アジア文化交流研究叢刊 第3輯『東アジアの儀礼と宗教』、雄松堂出版、2008年。

『酬世錦囊』には初集と続集があり、国会図書館本でその構成を示すと以下のようにになっている<sup>5)</sup>。見られるように構成は同じであるが、続集にはあらたに「天下路程」が増補されている。

## [初集]

- 一、書啓合編（生活の様々な局面における手紙の文案集。全8巻）
- 二、家礼集成（冠婚葬祭。婚礼の挨拶状の文案集。百家姓のごときもの。全5巻）
- 三、帖式称呼（冠婚葬祭の招待・挨拶状の書式。日常生活の様々な局面における礼儀作法。親族の呼称。全2巻）
- 四、類聯新編（様々な時と場所にふさわしい対聯や扁額の実例集。全2巻）

## [続集]

- 一、書啓続編（全4巻）
- 二、家礼纂要（全5巻）
- 三、称呼帖式（全3巻）
- 四、対聯雋句（全5巻）
- 五、天下路程（全国水陸路程。全2巻）

さて、『酬世錦囊』における『朱子家礼』の問題であるが、上引のように初集、続集ともに二と三の部分に『朱子家礼』に関わっている。初集では「家礼集成」と銘打っているが、実際は清の張文嘉『齊家宝要』の引き写しであり、続集の「家礼纂要」は清の蔡世遠『家礼輯要』を襲用している。前稿では〈古礼一折衷一簡便〉という枠組みを使って、小序で述べた〈内在的変容〉の観点から論じ、〈外在的変容〉の観点は導入しなかった。そこで云う〈古礼〉というのは理念、規範または原理主義と云い換えてもいいし、〈簡便〉はそれに対する慣習ないし妥協のことである。〈折衷〉（規範と慣習との融合、古礼と簡便の調和）を挟んでその間を振り子のように揺れ動くのが〈人情〉（自然な気持ち）になる。すでに二の『朱子家礼』のパートにも挨拶状の文案が取り込まれ、三は右にも記したようにその冠婚葬祭の挨拶状の書式をはじめとする、日常生活のさまざまな局面における礼儀にまつわる書状のために設けられている。要するに本

5) ○初集（国会図書館本、分類番号180-30）聯墨堂、乾隆36（1771）年、鄒景揚（1744～1809）序、鄒可庭、鄒景揚、謝梅林編纂。○続集（国会図書館本、分類番号180-30、初集との合本）勤思堂、光緒2（1876）年刊、乾隆55（1790）年、鄒可庭（1713?～1790、景揚の父）序、鄒可庭、鄒景揚、謝梅林編纂。今堀誠二「酬世錦囊の版本について」（『岩井博士古稀記念論集』1963年）は本書の先駆的論文。ただし、初集しか扱っていない。ほかに、酒井忠夫「『酬世錦囊』と『家礼大成』」（前掲注1）『中国日用類書史の研究』所収、初出、『汲古』47号、2005年）は短い紹介。続集は他に琉球大学・原忠順文庫本（欠巻あり）に蔵されているが、比較的稀観。

書は、『朱子家礼』の名のもとに「酬世」の仕方が指南されているわけである。それをさらに推し進めたのが『應酬彙選』だと思えば分かりやすい。

### 3 『應酬彙選』というテキスト

小論で取り上げるのは国立公文書館・内閣文庫蔵、木村兼葭堂旧蔵<sup>6)</sup>の『應酬彙選二集』というテキストである。まず、基本的な書誌情報を示せば以下ようになる。

應酬彙選二集四卷 文公家禮四卷 清潘文光撰 清姚時勉注 清乾隆十八年 姑蘇書業堂刊  
全四冊

本書の実体からすれば以上のように「應酬彙選二集四卷 文公家禮四卷」と表記せざるを得ないのであるが、序文のあとに続く「目録」ではそうはなっていない。全四巻から成る「目録」では「文公家禮四卷」は独立して立てられておらず、巻四の「人事門」のなかに「文公家礼 蘇州則例 写帖款式」として記されているにすぎない。なお、版心はそれぞれ「應酬彙選」と「文公家礼」として区別されている。元来は各々独立していた書物を一緒にしたのかもしれないが、その成立の経緯にはよく分からないところがある。

やや繁雑に渉るかもしれないが、「應酬彙選二集四卷 文公家禮四卷」の内容を目録に即して示せば以下ようになる。

#### 「應酬彙選二集」の構成

標題：應酬彙選二集

著者：茗溪耕山潘文光星野輯 晋水姚時勉亦思註 竹溪沈樹藻大川 / 晟溪凌誼稼軒參訂  
晟溪閔肇發維禎校閱（巻一冒頭の表記による）<sup>7)</sup>。

巻一

問候門（十二月申候など）

慶賀門（賀中举人など）

6) 木村兼葭堂の蔵書の大部分がその歿後、幕府に收藏された経緯については、拙稿「拡大する知 木村兼葭堂—その外国認識を中心に」『都市の異文化交流—大阪と世界を結ぶ—』、清文堂、2004年、注21に関係論文を引いておいた。

7) 「茗溪」は浙江省湖州の別称。封面では「吳興潘星野輯」となっているが、「吳興」も湖州の別称。「晋水姚時勉亦思」は後述するように『酬世錦囊全書』の編者。晋水は山西省太原か。『酬世錦囊全書』の姚時勉序の日付けは嘉慶9（1804）年（嘉慶九年歳在甲子新鐫桂秋月、晋水姚時勉亦思氏題于嘯月軒中）。彼は『應酬彙選二集』に注を施したあと、その本文も編者として取り込んで『酬世錦囊全書』を編纂したのかもしれない。

人事類 仕宦門（賀赴県任など。しかし途中から、賀娶妻など）

令節類（賀元旦など。「令節門」とすべきか。「門」と「類」の用法に混乱あり）

## 卷二

構遷類（賀瑩寿域など。この途中「答賀瑩寿域」まで、構成、順序、本文、註に至るまで『酬世錦囊全書』卷一（後述）とまったく同文）

人事門 託薦類（託媒求配など）

人事門 酬謝類（謝代買貨物など）

人事門 貸索類（借錢など）

人事門 索取類（索粟など）

遠出門 迎送類（餞別友人など）

行程類（邀友同舟行など）

家信類（在外託帯回家信など）

勸慰門（慰友溺水など）

## 卷三

餽送門 文具類（送筆など）

雅具類（送琴など）

衣服類（送衣など）

花卉類（送紅梅など）

果品類（送龍眼など）

葷味類（送生鴨など）

蔬味類（送茶など）

## 卷四

人倫門（祖父母子、師弟、朋友などに関連する語彙）

人事門（婚姻、生日、郷榜、会榜、殿試及第、入学、陞擢、迎、送、賀祝、餽言、答謝、讌集、居喪、に関連する語彙。目録にある「文公家礼、徽州則例、写帖款式」は本文中になく、先述のように「文公家礼四卷」として別立て。以下の構成を参照）

### 「文公家礼」の構成

標題：文公家礼

著者：茗溪耕山潘文光星野輯 晋水姚時勉亦思註 竹溪沈樹藻大川 / 晟溪凌誼稼軒參訂

晟溪閔肇發維禎校閱（卷一冒頭の表記による）

卷一

徽州則例

東聘格式

嫁女六礼帖

卷二

分類称呼（父党、母党、妻党、……師傅、朋友……）

請宴帖式

餽送帖式

卷三

冠礼帖式（戒賓式、宿賓式、復書式）

婚礼帖式（求吉帖式、納采礼書、納幣礼式……男家礼目……粧奩礼帖……）

礼書活套（正月礼書、正月回書、二月礼書、二月回書……）

卷四

喪服図制

喪礼（始死、斬衰、齊衰……）

五服（喪服之図、本宗五服之図、妻為夫党服図……）

服制総記

喪服雜記、喪礼雜記（慰人父母亡疏……）

銘旌式、訃状式、喪妻訃状、請題主式、請僧（道）帖式、承重喪牌、用牲祭奠……。

この「文公家礼」巻は、そのタイトルからの予想に反して『文公家礼』のテキストを掲載するという体裁を取っていない。この点は『酬世錦囊』などとの大きな相違である。見られるように全四巻の大部分は冠婚葬礼に関わるさまざまな「帖式」に費やされており、どのようにそれらの礼を行なうのか、その手順はまったく無視されている。それどころか、たとえば巻二所収の「餽送帖式」などは、人に物を贈る際に付ける文例集であり、これなどは本来の『文公家礼』とは関係がない。巻四ではもっぱら喪礼が扱われているが、もとより『文公家礼』に則った喪礼の作法が記載されているわけではない。冒頭の「始死」（『家礼』に云う「初終」）の項の下に「易服」「被髮徒跣」「小斂」「大斂」「成服」と列挙されているが、これは喪礼の初期段階での手順ではない。ここでは死者は置き去りにされ、遺族・親族が取るべき行動に重点が置か

れている。次の「斬衰」「齊衰」「大功」……も死者をどう扱うかではなく、死者との親疎の関係からどういう喪服を着用するかという問題である。本巻ではこの「五服」（斬衰、齊衰、大功、小功、總麻）に重点が置かれ、明の丘濬『文公家礼儀節』登載の「本宗五服之図」をはじめ、「妻為夫党服図」ほか諸図が載録されており、文章よりもひと目で分かる図が重んじられている。冒頭に「喪服図制」と記されている所以である。なお、四礼のうち祭礼関係の記述が少ないことに留意が必要である。それと覚しきものは、巻四の末尾に添えもののように収められた「用牲祭奠」「猪羊祭奠」「祭礼全式」（以上、供物のリスト）程度である。当時、祭礼はごく内々で行なわれ「応酬」の対象外に置かれていたからなのかどうか、この問題は改めて一考するに値するかもしれない。

以上、「應酬彙選二集」の中身をざっと紹介したわけであるが、「文公家礼」を含みながらも全体のタイトルが「應酬彙選」になっていて、「目録」では「文公家礼」に独立した地位が与えられていない理由も理解できたように思う。本書の全体のコンセプトが「應酬」としての書啓や帖式であり、テキストとしての『文公家礼』もその「應酬」の文脈に組み込まれ、むしろここではテキストとしての『文公家礼』がある種概念としての〈文公家礼〉になっていた。テキスト自体の変容というより、ここでは『文公家礼』（または〈文公家礼〉）の位置づけが大きく変容ないし拡散している。朱熹の元来の意図では「修身齊家の道、謹終追遠の心」（「家礼序」）の養成に資すために編まれたはずであるが、ここには〈礼〉の精神など望むべくもない。

#### 4 『應酬彙選二集』の位置

「應酬彙選二集」なるテキストの基本的な性格は簡略ながら前章でひとまず述べ終わったのであるが、この書物の研究史や書誌の問題が残されている。

管見の及ぶ限り、直接本書に言及した研究はない。上記酒井忠夫は類似の『酬世錦囊』の発掘者と云っても過言ではないが（注5参照）、本書は扱われなかったようである。台湾の呉蕙芳女史は『万宝全書』や『雑字書』の詳細な研究で知られるが、本書は女史の研究と少し性格が異なるせいか、まだ俎上に載せておられないように思う<sup>8)</sup>。

書誌上の問題として、まず成立年を明らかにする必要がある。小論第三章で小論が依拠しているテキストが「乾隆十八年」刊本であることを述べたが、それは封面の記載に基づいている。参考までに封面の全文を転記しておく、「乾隆十八（1753）年重鐫／吳興潘星野輯／應酬彙選

8) 呉蕙芳『万宝全書』、国立政治大学歴史学系、2001年、同『明清以来民間生活知識的建構与伝通』、台湾学生書局、2007年など。



／姑蘇書業堂行」。ここに「重鐫」とあるからこれは初刊本ではない。しかし、後述するようにこの木村蒹葭堂旧蔵・内閣文庫本自体が稀覯に属するので、初刊本など杳として行方知れずと云うほかはない。ただ、本文の記載中に「康熙某年某月某日某時」（文公家礼卷四、訃状式）と見えるから、康熙年間の成書であろう。いまひとつの問題は「二集」の意味である。「二集」というからには「初集」の存在が前提になっているはずであるが、「初集」なるものも探し出せていない。あるいは「初版」が即「初集」であったのかもしれない。康熙年間に出されたものは「文公家礼卷」が独立しておらず、前掲「目録」にあったようにあくまで「應酬彙選」の附録程度の扱いに留まっており、それが「文公家礼四卷」として別出された段階で「應酬彙選二集」と呼ばれたのかもしれない。しかしこれは推測の域を出るものではない。

次は編者の問題である。内閣文庫本には前記のように「茗溪（呉興）潘星野輯」とあったから何の問題もないように見えるが、事柄は実はそれほど単純ではない。というのも、同じ「應酬彙選」というタイトルの本の編者としては陸九如なる人物の方が一般的なようだからである。注9の『應酬彙選』の所蔵リストを見ていただきたい<sup>9)</sup>。これは「應酬彙選」という語で「全国漢籍データベース」を使って検索してみたものであるが、これを見る限り、潘星野輯の『應酬彙選二集』の方が稀覯であって、一般に通行していたのは陸九如輯の『應酬彙選（新集）』であったらしいことが見えてくる。

そこで次に、『應酬彙選二集』と『應酬彙選（新集）』、さらに潘星野と陸九如との関係如何、という問題が出てくる。筆者が実見したのは注9)のデータのうち、②の京都大学文学部蔵本

9) 「全国漢籍データベース」：「應酬彙選」

- ① 共和應酬彙選四卷 闕名 輯 民國三年 上海育新書局 石印本 愛知大
- ② 應酬彙選不分卷 清 陸九如 撰 乾隆四十九年 金閩學耕堂 刊本 京大文
- ③ 應酬彙選二集四卷 文公家禮四卷 清 潘文光撰 清 姚時勉 注 清乾隆十八年 公文書館
- ④ 應酬彙選新集八卷 時令麗句一卷 清 陸九如 輯 清 王相 輯 清末 奎昭樓 刊 光緒四年 蘇州掃葉山房 印本 東大総
- ⑤ 應酬彙選新集四卷 清 陸九如 輯 同治七年 刊本 一橋大
- ⑥ 應酬彙選新集四卷 清 陸九如 輯 清 刊本 一橋大
- ⑦ (上海鴻寶齋書局精校新增繪圖) 幼學故事瓊林四卷 首一卷 十三經難字音註一卷 新增應酬彙選三卷 補一卷 明 程允升 編 明 鄒聖脈 補 清 石韞玉 校 清 陸九如 編 (應) 清 石韞玉 補 (應) 民國元年 刊 石印 上海鴻寶齋 後修 廣益書局 東京都立 中央
- ⑧ (新增) 應酬彙選五卷 清 陸九如 編 清光緒十七年 刊 酒田市立

\* 「文公家礼」で検索すると「宋 朱熹 撰 潘文光 輯 [姚時] 勉亦思 註 刊本 應酬彙選之一 (文公家礼) 存卷三第四 二松學舎」が出てくるが、これは「二集」の端本であろう (未見)。『中国古典総目 子部』類書類・類書之属 専編には、「応酬彙選新集 清陸九如纂輯 清同治十一年尺木堂刻本 天津」の著録があるのみである。

「應酬彙選不分卷 清 陸九如 撰 乾隆四十九年 金閩學耕堂 刊本」である。京大本は全4冊。11.0×16.7。封面に「乾隆甲辰（49, 1784）年秋鏤、雲間陸九如輯、重訂應酬彙選全集、内附時尚帖式、金閩學耕堂梓」とある。「総目」での標題は「應酬彙選新集」と「新集」の二文字が附されている。「乾隆甲辰巧月」の「峙庵居士」の序に「雲間陸九如先生の輯する所の應酬彙選一書、梓行已に久し。其中の簡札は俱に往復多く、均しく極めて精括真切にして、宛ら面談するが如し。……甲辰仲夏、宝翰主人又た新板を重鏤し、更に時尚帖式若干首を増入す。……」とある。「應酬彙選総目」の下に「尺牘堂梓行」と刻されている。全書は、金、石、糸、竹、匏、土、革、木の八部に分類され、金・石部は尺牘、糸部は寿文、祭文など、竹部は姓氏、匏・土部は分類名聯（各種の対聯）、革部は婚礼関係、木部は喪礼関係の記述である。木部の項目を「総目」から抜き出すと、喪葬祭礼大略（ここには一応祭礼もある）、喪葬祭礼帖款、弔奠帖式、同宗九族五服註解、喪葬図注、となっている。特に「家礼」という標題はないが、革・木部は実質的に『文公家礼』を踏まえたもので、「本宗九族五服図」ほか服喪の図解を多く記載する。この「家礼」巻が『應酬彙選二集』のように別立ての体裁にはなっていないというのは、一箇の書物として考えた場合、存外大きな差異になるのかもしれない。

なお、『應酬彙選新集』のなかには、ネット上でダウンロードが可能な版本もある。Bayerische Staatsbibliothek（バイエルン国立図書館）のMünchener Digitalisierungs Zentrum（ミュンヘン・デジタルセンター）がその便宜をはかってくれる。該図書館のものは、「道光己酉（29, 1849年）重鏤、應酬彙選新集、増補帖式附後、聚錦旭蔵版」（以上、封面による）というもので、京大本と同じく「應酬彙選総目」の下に「尺牘堂梓行」と刻され、金部巻頭、「應酬彙選尺牘」という標題の下に「雲間陸九如纂輯」と刻されている。微妙な異同はあるものの、金、石、糸、竹、匏、土、革、木の八部構成とその内容からして京大本と一致するから、「新集本」として同系統と考えてよいと考えられる。ただ、革部首葉標題「應酬帖式」下段にある、「琅邪王相晋生彙選／莆陽鄭漢濯之校梓」の双行は京大本にはない<sup>10)</sup>。それより重要なのは嘉慶6（1801）年の「稽山楓塘氏」の序である。この序文には陸九如の名前は見えないが、「向に潘子星野彙選有り、載する所の書函帖式……」という一文があつて、ここから「潘子星野彙選一書」（おそらく『應酬彙選二集』）が陸九如の本『應酬彙選新集』より先行することを推測しうる<sup>11)</sup>。

10) なお「琅邪王相晋生〔生は升の誤刻ならん〕」は、『玉匣記』（通行本）の序を書いた人物（琅邪王相晋升）と同一人か。「……時康熙甲子（23, 1684年）嘉平琅邪王相晋升識」（乾隆53年、姑蘇大雅堂刊『玉匣記通書広集』序）。

11) 若干余談めいてくるが、岸上操『漢学一千題』（通俗教育全書 第五拾号、東京博文館版、明治25年）に本書への言及がある。「頃日清人ノ新著数種ヲ見ル中ニ陸九如ノ應酬尺牘彙選アリ凡ソ尺牘の文例熟語書式

結論的に、『応酬彙選』は、二集系（潘文光輯）と新集系（陸九如輯）に大別しうるはずである。そして、別立ての『文公家礼』を含む二集系はいつのまにか廃れて、応酬尺牘に一元化された新集系がもてはやされたと云いえるのではないだろうか。『應酬彙選』（初集？二集？）が出たあと、陸九如が康熙晩年か乾隆初年に、それを『新集』として改変したと推測するのが自然であろう。注<sup>12)</sup>に引いたデータベース⑦の「新刻簡要達衷集時俗通用書東三卷」（国会図書館本）の序の掉尾に、「時乾隆三（1738）年歲次戊午……郷進士知寧県事八十三叟雲間陸九如、敬題於霞城旅舎」とあり、ここから逆算すると、陸九如の生年は清順治3（1656）年になる。清初の人物であるが、潘文光との先後関係は微妙である。

ここから附論になるが、実は陸九如はもうひとつの書物に関わっている。簡略化してそれを『達衷集』と呼んでおくが、注12)に「陸九如」の語で検索した「全国漢籍データベース」のデータを掲げておいた。前掲注9)と重なるものも少なくないが、データベースの性格上やむを得ない。因みに、①の公文書館（内閣文庫）蔵本は、『應酬彙選二集』と同じく木村兼葭堂旧蔵本である<sup>13)</sup>。

この『達衷集』に関して補足しておきたいことがある。これはデータベースには採られておらず、筆者が実見したものであるが、まず基本的な書誌的情報を示しておけば、「新刻簡要達衷集時俗通用書東二卷 清 陸九如輯、（日本）田中清訳、秋田屋伊兵衛ほか刊、安永五（1776）年。関西大学図書館蔵」ということになる。本書は注12)に挙げた⑦の乾隆十七年、博古堂刊

---

等網羅して遺サス頗ル時文ノ体裁ヲ伺ウニ足レリ……」（附録251頁以下）はおそらく本邦への最初の紹介ではないだろうか。

12) 「全国漢籍データベース」：「陸九如」

- ① 増補尺牘類函達衷集二卷 清 陸九如 清乾隆十五年序 益智堂 刊 公文書館
- ② 増補尺牘類函達衷集二卷 増頭書 清 陸九如 編 乾隆十五年序 刊 益智堂 東北大
- ③ 應酬彙選不分卷 清 陸九如 撰 乾隆四十九年 金閩學耕堂 刊本 京大文
- ④ 應酬彙選新集八卷 時令麗句一卷 清 陸九如 輯 清 王相 輯 清末 奎昭樓 刊 光緒四年 蘇州掃葉山房 印本 東大総
- ⑤ 應酬彙選新集四卷 清 陸九如 輯 同治七年 刊本 一橋大
- ⑥ 應酬彙選新集四卷 清 陸九如 輯 清 刊本 一橋大
- ⑦ 新刻簡要達衷集時俗通用書東三卷 清 陸九如 輯 乾隆十七年閩漳博古堂 刊 国会 東京
- ⑧ （上海鴻寶齋書局精校新增繪圖）幼學故事瓊林四卷 首一卷 十三經難字音註一卷 新增應酬彙選三卷 補一卷 明 程允升 編 明 鄒聖脈 補 清 石韞玉 校 清 陸九如 編（應）清 石韞玉 補（應）民國元年 刊 石印 上海鴻寶齋 後修 廣益書局 東京都立 中央
- ⑨ （新增）應酬彙選五卷 清 陸九如 編 清光緒十七年 刊 酒田市立

13) 注12) 所引①の「清 陸九如 清乾隆十五年序」は、本来の「乾隆三年歲次戊午〈1738年〉……八十三叟雲間陸九如（序）」（⑦の国会本）を、「乾隆歲次庚午〈乾隆15、1750〉……八十三叟雲間陸九如」に改竄したものの。

本（国会図書館蔵）の和刻であるが、原書の上中下三巻を上下の二巻に縮めて訓点を施したものである。原書の中巻が家族（宗族）内の遣り取りゆえに省いたのかもしれない。陸九如の序文の代わりに田中清の序文（安永四年）が置かれているが、封面などは国会本とまったく同じである。上に「田中清訳」としたのは、上巻首行の「雲間陸九如先生纂輯 東都 田中清訳」に従ったまでであるが、この「訳」の語に留意したい。田中清は訓点を施したうえ、原文右側に送り仮名を附けただけでなく、左側に適宜訳語を挿入している。たとえば、原文「敢忘造就哉」の「造就」の左に「オトリタテ」（「謝推薦」と題された文章）、<sup>トリモチ</sup>「慰我桑榆暮景」の左に「老後ヲタノシマン」（「答復」）などという訳語を附しているのは、訓読を超えた翻訳として興味をそそられる。田中清（江南）は徂徠学派の大内熊耳の門人で、『尺牘軌物』、『尺牘啓発』、『尺牘綿裁』など尺牘関係書を多く編纂した。ほかに『六朝詩選俗訓』、『唐詩絶句解国字解』の著者がある。ともあれ、尺牘の模範文例集としての陸九如の本書は、あくまで文学・文体の文脈で捉えられている<sup>14</sup>。なお、田中清の序文中に（弟子高橋幹の跋文でも同様）「清人李九我……遂に蒙士の為に歳時通套の牘を為り、題して簡要と曰う。小子高橋幹獲てこれを喜び……」と記されており、編者が陸九如なることはこの和刻にも明記してあるのに「李九我」とは不可解である。

少し寄り道したかもしれないが、上記データによる限り、陸九如は『應酬彙選』系と『達衷集』系との双方に関与していたことになる。『應酬彙選』には、上述のように少なくとも二集系と新集系の二種あったが、改めて注意を喚起しておけば、『應酬彙選二集』にはどこにも陸の名は見えず、陸が関わったのは新集系であったと云いうる。そして、彼の『達衷集』はその具名からも察せられるように尺牘に特化していて、ここでは『朱子家礼』は消去されてしまっている。

## 5 応酬と家礼併存のテキストの流れ

第1章の「日用類書の分類」で少し触れたけれども、ここで改めて応酬と『家礼』的要素の双方を含む日用類書の系譜を簡単におさらいしておきたい。

まずは北宋の司馬光の『温公書儀』がある。これは四礼の段取りとさまざまな書式（必ずしも四礼と関わらない家書、訃告状ほか）を掲載したものである。『朱子家礼』に少なからざる影響を与え、朱熹はそこから「居家雜儀」と「居葬雜儀」を採って『家礼』に組み入れている。

14) 江戸中期の尺牘の流行については、高山大毅「滄溟先生尺牘」の時代—古文辞派と漢文書簡—『日本漢文学研究』6などを参照されたい。

次に『啓筭青錢』がある（巻一卷首の標題は「新編事文類要啓筭青錢」）。徳山潘毛利家に伝えられているのが泰定元年（元、1324）の重刊本。これは孤本であるが、古典研究会から影印版が出されている。前集、後集、続集、別集、外集に分けられており、前集に書簡などの文例が収められ（翰墨門、活套門、諸式門、通敘門）、別集が四礼になっている（冠礼門、筭礼門、婚礼門、慶寿門、喪礼門、祭礼門）。この四礼門（慶寿も含めたら五礼か）に各々挨拶文や帖式が附載されている。ただし有名人の模範文例が多い。

『事林広記』も重要である。南宋の陳元靚編。内閣文庫に元刊本が收藏されている。総合的な日用類書で、家礼類（前集巻十）、儀礼類、翰墨類（前集巻十一）が具わっている。家礼類に「男家草帖正式」、「女家草帖正式」、「婚書第一～第三幅式」、「聘定礼物状新式」、「致贈奠状式」、「慰人父母亡疏」などが収載されている。

『居家必用事類全集』はいわゆる小論第1章の⑤でいう「居家日用」に分類される代表的な類書であるが、その甲集の「書簡」に各種の範例が収められ、乙集「家法」に『朱子家礼』が組み込まれている。

『万宝全書』というのは明の万暦期から流行し始めた「総括的事文」、つまり何でもありの総合的な日用類書の総称であるが、たとえば『五車拔錦』（明万暦25〈1597〉年）は、特に『家礼』の語は見えないものの、文翰門（巻七）、啓筭門（巻八）、婚娶門（巻九、納采書式ほか）、喪祭門（巻十、訃書式、慰喪子など）を具備している。ただ、清朝刊の『万宝全書』から、文翰門は一貫して存続するものの、どういわけか四礼門が消える。『應酬彙選二集』から『達衷集』への流れとパラレルのところも見えて興味深い<sup>15)</sup>。

すでに第一章で酒井氏の解説を引用した『家礼簡儀』というのは筆者未見であるが、ここではさらに仁井田論文から拝借する。「福建布政使司左布政范（涑）頒行、明万暦三十五（1607）年（福建）澄邑陳我舎刊、尊経閣文庫本。巻首の書名は〈范爺発刊士民使用家礼簡儀〉。……第一冊に文公家礼を収む。そのあとに婚礼関係の文書として婚書式（寡婦再婚の場合のものとは異なる）、復婚書式などがあり……第二冊は〈彙選海内名家翰墨纂〉と題されており、この第二冊の終に家産分割文書雇傭文書、小作文書および郷約の類がのせてある。……」<sup>16)</sup>。范涑にはほかに、筆者未見だが『新刊士民使用家礼易簡』（明版）もある（『尊経閣文庫漢籍分類目録』）。

尺牘・帖式などと『家礼』が併存している『酬世錦囊』については既述した。

この『酬世錦囊』系で『酬世錦囊全書』というテキストがある。「晋水姚時勉亦思・彙選（輯）、

15) 『万宝全書』の類目の変化については、呉蕙芳『万宝全書：明清時期的民間生活実録』、101頁、「明清時期各版《万宝全書》類目表」を参照されたい。

16) 仁井田陸「元明時代の村の規約と小作証書など」『東洋文化研究所紀要』第八冊、1956年、163頁。

嘉慶9（1804）年、姚時勉序」という日用類書である。その内容は封面によれば、「天下路程、江湖機関、尺牘家礼、帖式称呼、分閔立継、契約法程、新聯婚啓、慶賀類詩、題贈匾額、喪家遺規、男婦誄章、各項祝文」と比較的豊富である。姚時勉が『応酬彙選二集』の注釈者であるのが注目される<sup>17)</sup>。

これも筆者未見であるが、第一章の分類のところ⑨の「村落日用類書」に挙げた『応酬便覧』という書物がある。「閩汀澄清馬侯輯、十卷、嘉慶23（1818）年、惜余老人序」というのが基本的な書誌情報になる。その内容は以下のようになっている。

卷一～三（尺牘）、卷四～五（家礼儀節。冠婚葬祭礼、称呼纂积、往来帖式、敦請碎錦、儀状碎錦、饋送礼物活套）、卷六（詩文風雅。挽詩、祭文、神廟祭文）、卷七（路程規略）、卷八（書契禁呈式）、卷九～十（对聯）<sup>18)</sup>。

ほかに家蔵のもので、外題『増訂版 正版 家礼大成』、内題『酬世錦囊正家礼大成』、呂子振輯、楊鑑重校、雍正13（1735）呂序、中華民國11（1922）年楊序、中華民國69（1980）年、竹林書局印行第9版、8巻全1冊、というのがある。その内容は以下である。

卷一（学礼要務、冠笄析義ほか）、卷二（称呼帖式、往来拜帖）、卷三（人品称呼、時令名号ほか）、卷四（婚姻儀礼、結婚新式、酬神迎送文ほか）、卷五（世系事跡、寿文式ほか）、卷六（葬祭総論、喪服総図、祀礼辨考ほか）、卷七（誄軸祭文、治喪礼儀、学界通用祭文ほか）、卷八（葬祭八礼、卒哭祝文、時祭儀礼、祀神礼儀〈玉清元始天尊もあり〉、弔輓对聯など）。

上に記したように本書には「礼は人情に本づく」に始まる呂子振の序と、重校者の楊鑑の序文が付いている。後者のものを少し長いが全文引いてみる。「世の『朱子家礼』を尊崇すること久し。清初に迄りて呂羽仲前輩の『家礼大成』、較や帙多しと雖も、然れどもみな『朱子家礼』の法を祖とし、世の用と謂うべし。惟だ時を歴すること既に久しく、今昔或いは異なること無くんばあらず。況んや印版老いて字画多く真を失うをや。再び重新に梓に付さざるべからず。これに乗じて余為に校対し、並びに昔雜論の繁有るを以て略ぼこれを刪り、今簡便の宜しきもの有れば稍やこれを増し、もって大雅の訂正を俟ち、家に居るものをして『家礼』にこれ遵依することあらしむ」。ここで留意すべきは、「酬世錦囊」というタイトルを残しつつも、呂も楊も本書の核心はあくまで『朱子家礼』にあると考えている事実である。楊序に云う、削られた

17) 本書は松浦章氏より借覧したもの。氏はこれを徽州屯溪で入手された由であるが、ただし巻一のみ存巻して、家礼巻がない端本なのが惜まれる。巻一上層：古今名書法、天下路程〈福建省城→北京から始まる〉など、下層：尺牘。

18) 前掲王振忠「明清以来徽州的礼生与儀式」による。

「雑論の繁有る」ものとは、『家礼』から離れた「酬世」のための種々の書状や帖式の範例を指しているはずである。もっとも、完全に『朱子家礼』の旧に戻したのかということではなく、「今昔の異」というものもあるし、「簡便の宜しきもの」はこれを増加したと述べている。本書については酒井忠夫氏の言及があり、「漳州府は汀州府とともに福建省では客家<sup>はっか</sup>の多い地域であるから、客家の伯公信仰が『重校家礼大成』目録巻四の請神文の中に見られる。……（これは）楊鑑の重新活版本に新たに入ったものではなかろうか」と指摘しておられる（酒井前掲書235頁）。小論の冒頭で『家礼』の内在的変貌と外在的変貌について述べたが、本書は前者の文脈のなかで捉えられるべきであろう。

最後に、いまひとつ民国期のものとして『实用 酬世 宝典 家礼通書』を挙げておきたい。これも家蔵の通俗書で、黄耀徳、郭海龍編著、中華民国56（1967）年黄序、中華民国62（1973）年、五術書局再版、7巻全1冊、という本である。本書は仏教、道教、民間宗教・習俗をふんだんに吸収しており、以下にその内容を示すように、ここでは前掲の『家礼大成』と大きく異なって『朱子家礼』（または〈家礼〉）は一種の符号に過ぎないと云っても過言ではない。換言すれば、『朱子家礼』から大きく逸脱しているのに「家礼」と称しているのである。

巻一：処世礼文集（処世金言、五経概論ほか）、巻二：家礼摘要（称呼、往来拜帖、時令名号ほか）、巻三：喜慶礼集（婚礼、集団結婚、旧式婚礼、請帖、賀商店開幕対聯ほか）、巻四：葬祭礼集（葬祭の礼、標準葬礼、追悼会、男葬通用祭文、勅二十四山神拜后土訣ほか）、巻五：表疏牒文集（祈安吉祥文疏、冥財牒文、拜師帖ほか）、巻六：法門疏集（葬典門、修因門、弭災門、祈恩門、薦悼門、薦大沙門、法門聯対）、巻七：祈安植福科儀、巻八：祭靈超度科儀（祭表科、普施孤魂科ほか）。

## 結語に代えて

つとに『温公書儀』をはじめ唐宋の書儀には尺牘・帖式が併載されており、元代の『啓筭青錢』には冠婚葬祭（プラス慶寿）の各門に挨拶文や模範文例が附載され、明代万暦以降、各種の『万宝全書』には『家礼』と関わる多様な挨拶文その他が登載されるようになり、とりわけ清朝に入って『応酬彙選』や『酬世錦囊』が〈酬世〉という視点からいっそう多様な帖式を掲載して江湖から歓迎された（『酬世錦囊』はロングセラー）。特に前者の『応酬彙選二集』においては、前述したように尺牘と『家礼』の二本立て（二本に純化）になっていて、『家礼』巻のなかに様々な挨拶文や帖式が含まれているだけでなく、『家礼』は応酬（または応酬文）のカテゴリ中の一環として位置づけられている。テキストとしての『家礼』そのものより〈家礼〉の意義づけないし〈家礼〉概念の〈変容〉がそこに見出せるのではないか。これを〈変容〉と呼

ぶのが正しいかどうかはともかくとして、『応酬彙選』を通して、テキストから社会や共同体へ触手が伸長し、人間関係の結節点のひとつとしての『家礼』または〈家礼〉像が見えてくると云いうるのではないだろうか。